佳作

吃音症から学んだこと

新潟県小千谷市立片貝中学校
２年　山口　利織

私には、吃音という障害があります。吃音とは、話す時に最初の一音に詰まってしまうなど、言葉が滑らかに出てこない障害です。

この障害には、音の連発や伸発、難発などいろいろな症状の人がいますが、私は、ことばを出せずに間があいてしまう難発が多いです。特に、人前で話す時など、緊張する場面で症状が強く出ます。ですので、自らそのような場面を避けてきました。

中学校に入り、小学校と比べて人前での発表や日直での話す量が多くなったりなど、私にとって、とても不安なことが多くなりました。

日直の日、友達に「緊張する。」と言いました。すると友達は「ただ原稿を読むだけだから、大丈夫だよ。」と言いました。私は、その言葉でみんなは簡単にできることが、自分にはできないということを知り、とてもショックを受けました。その日の日直は、いつも以上に言葉が詰まってしまい、その時の教室のざわつきが自分のことを言っているのだと考えると、とても胸が痛くなりました。

その日の夜、その時の状況を思い出すだけで涙が止まりませんでした。明日から、どのように学校生活を送ればいいのか分からず、とても不安で学校に行くのが怖くなりました。

そんな時にニュースで、「注文に時間がかかるカフェ」というのを見ました。そのカフェは、スタッフは全員接客業の夢を持つ吃音症の人たちで、その人たちは自分に自信を持って笑顔で接客をしていました。とてもかっこよくて、素敵だと思いました。そして、吃音症で悩んでいる人は私だけではないということを知って、安心しました。

私は、今唯一自分に自信を持っていることがあります。それは、バレーボールです。小学校４年生から始めました。最初は、うまくできなかったけれど、毎日練習を重ねていくうちに自分の思ったとおりのプレーができるようになり、自信につながりました。とてもハードな練習でした。そのおかげで県１位という夢はかなわなかったけれど、県３位という成績を残すことができました。

私は、中学校に入ってもバレーボールを続けるため、バレーボール部に入りました。県大会出場を目指し、練習してきました。結果は県大会出場できました。目標は達成できたものの、１回戦敗退でとても悔しい結果で終わってしま

いました。代替わりをし、新チームのキャプテンは私が務めることになりました。私にとっては、とても重い決断でしたが、私には吃音症を理解してくれるチームメイトがいるので安心してすることができました。新チームでは、北信越大会出場を目標に掲げて、日々練習に励んでいます。この目標は、決して簡単なことではないけれど、私がキャプテンとして責任を持ってチームをまとめ、分からないことはしっかり仲間に頼ってチーム全員で心をひとつにして、この目標を達成したいです。そして、この１年悔いの残らないように、自分なりに努力して最後は、笑顔で終われるようにしたいです。

２年生になり、私はバレーボール以外にもいろいろな経験をしました。特に心に残ったことは、職場体験です。私は、総合病院に行きました。そこでは、いろいろな科や部を回りました。その中でも私が一番興味深かったのは、リハビリテーション科です。作業療法士、理学療法士、言語聴覚士の三つの体験をしました。その中で、私が興味を持ったのは、言語聴覚士です。職場体験に行く前は、こんな職業があることを知りませんでした。でも実際に体験してみて、この職業は主に話す、聞く、食べるの障害がある小児から高齢者を、必要に応じて訓練や指導する職業だと知りました。

このような経験を生かして、私みたいに吃音などの話すことで悩んでいる人や、そのほかにも聞く、食べることで悩んでいる人をサポートし、勇気を与えられる素敵な言語聴覚士さんになりたいです。そして、吃音症の７～８割は成長とともに、治るといわれていますが、もし治らなかったとしても、しっかり向き合っていろいろなことに挑戦していきたいです。